授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2160 号

Exploration of the effect of restoration of masticatory function using immediate dental loading implant and the potential rule in anti-aging medicine

歯科即時荷重インプラントによる咀嚼機能の回復がもたらす影響と抗加齢医療に果たす役割の探求

小関　結里（こせき　ゆり）

博士（医学）

論文内容の要旨

高齢化に伴って認知症を患う高齢者が増え様々な問題が発生している中で、歯科がそれを担う重要な位置にいると考える。う蝕や歯周病などによって歯が喪失した場合に、適正な咀嚼機能を回復しておかなければ栄養面の問題が発生し、結果として要介護度が高まることになってしまうのが現状だ。

歯の喪失に対する補綴治療の目的の１つに咀嚼機能の回復がある。咀嚼することの重要性はこれまでに認知されているが、咀嚼は単なる食物の摂取や消化だけにとどまらず、全身の健康増進に寄与していることが明らかにされてきている。

後天的な咀嚼機能の喪失・回復が歯科インプラント術の応用により生理的機能にいかなる影響が現れるかを標準的な計測法を利用して具体的に解析することを目的に、研究を行った。

歯牙欠損により咀嚼機能を喪失しストレスを抱えた 31 名(男性 12 名 64.1±4.5/女性 19 名 59.4±2.1 歳)を研究対象に、歯科即時荷重インプラント術による咀嚼機能回復前・後の経時的変化をドライ電極式脳波計による脳波、ERIZA 法による唾液成分、全顔撮影・肌画像解析システムによる肌の色彩度の測定から評価した。咀嚼機能を喪失した人は通常時に健康な成人の覚醒時には一般的に計測されないδ波が認められた。ストレスの評価に用いた唾液コルチゾール値は施術後安定と共に減少し、口腔周囲筋が刺激された事で顔の色合い、表情、肌状態の改善が認められた。

咀嚼機能の回復は心身に健康をもたらし、健康寿命の延長にも繋がると考えられ、抗加齢医療に貢献する可能性が示唆された。